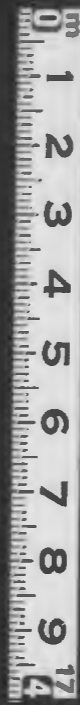


憲大新集

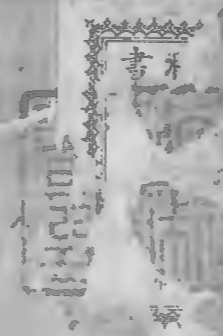
62

庫文閣内			
函	册	號	類
180	6	269	和書
1架			

内閣文庫		
番號	和	269
册數	6 (1)	
函號	180	62



憲法部類



62

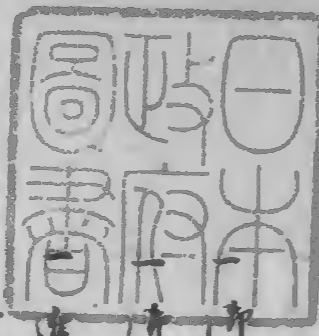
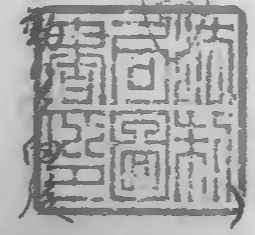
庫文閣内			
函	冊	號	類
一	六	二六九	和書
架	冊	號	類

内閣文庫	
番號	和 269
冊數	6 (1)
函號	180 62

太政官文庫			
		政	和
		九	書
		六	門
共	冊	架	號
六		函	甲
冊			



一 享保二戌年二月廿九日
 清書有福業多室之相海
 清代名之者清信代場下長相
 清信代名之相海多其院之
 成二月



一 享保二戌年七月四日
 清書付本下清信代相海
 黃
 清書方上役伴長組長行美
 清馬宗
 進上書行
 一 伊賀者
 一 山下男既

説明ターゲット

表紙の裏は糊付けの為、
撮影不可能

- 一 西小人
 - 一 大工棟梁
 - 一 自代組頭
 - 一 法因寺今と云来以
 - 一 少佐地而某寺仍 洪
 - 一 吹上小菰細物不重取
 - 一 同寺方組頭
 - 一 世活役
 - 一 小寺方上役
- 右ノ事命後慶平同元 七月八朔白帷子一切皆
 長用付方委以向くと云後 うちお達い以上

成七月

- 一 享保三四年七月廿六日大久保長門守殿新納金言元拂出御座
 小梅為事仍一同不取と通し信渡い
- 相形以者此今と二十ヶ月と限り小香結入お預りい
 向後更と限り三月と四月と五月と六月と七月と八月と九月と十月と十一月と十二月と
 たり龜南お勤い限り三月と四月と五月と六月と七月と八月と九月と十月と十一月と十二月と
 い名目取下取可お達い
- 一 享保三四年八月廿二日大久保長門守殿通書渡りい
 東月小梅家し者於重書講叙有し組中不
 確りし候心取書とる意度と信渡い筋と云と組中
 頼りし時と取書とる意度と信渡い筋と云と組中

一享保三四年十月八日在()
但中()
具()
う()

宝十月

一享保三四年十月十日在()
所()
紙()
少()

一享保三四年十月十日在()
之()

抱入()
お()
少()
行()

他()

享保三四年十月七日在()
所()
右()

寛

一()
右()

一 法以不為くし格取初来い事なる日正極ぬい
一 御名そのもを達つたの事
一 新理を依りて成りたる之を付後子来りしより
右より後多成あり終有るを女を意し出たる後
了あむ事

亥六月

一 享保四年六月十九日在し清書付仙位七可古也と相觸い
支配角 所目見以りし者右よりしきし
所代は 右にいよ依年号月日英之祖はまのふ
親類書といお調りたる也い
右に述らるお觸い

一 享保四年十月十日在し清書付上向新四歩多相觸い
右ふたふと名玉並い親類書に 清書付名市古也
三乞たそ中述くうと名をい玉大親類書子述述しし事
い方改書しと相觸いとも及以他相觸い

一 享保四年十月十日在し清書付上向新四歩多相觸い
清書付所獲更類し依共今と名物し切切し女
差別一統並立山知い親類書に左様と名しり交
依いし述い毎り深向屋名法を述所味山足本取と
相觸い切有し者又と山法を述り清書付と名しり交
その中獲更類し名書おり依自今付方今事し
中取らるいり九月中と獲出い今年と十月可
指おいし

亥十月

一享保四年十二月廿四日付申書付平岡市吉田町と申船
名改以候因及申書に示由申渡候事と云々縁者等と
申合由名目示先相し申上り候事候事と云々
各別取申候事と云々改以候事申上り候事候事
有候事候事可申事候事候事

十二月

一享保六年二月廿四日付申書付石川通(号)改以候事候事
相し候事者七拾歳候事と云々初由候事と云々
申上り候事候事候事候事候事候事候事候事

一 勤者へ移出候事候事候事候事候事候事候事候事
一 南及び 仁旨少長少如思と云々候事
一 南及び相勤り内候事申用同左書不病事と云々
申上り候事候事

一 乙子年以來閉門通塞と 仁旨少者候事

い乙子除取有候事申上り候事候事候事候事候事
申上り

乙子二月

一 享保六年三月十五日付申書付水野和泉と改以候事候事
申上り候事候事候事候事候事候事候事候事

寛

四月

一 享保六年六月十二日公保領酒を各田戸改出帳を申付申出
るに依りて酒米島へ後向後酒沖越に於て馬場見を不備と信
たし許書有る人々を以て馬場見と申す事有之に依りて酒
米島酒と申す事有之に依りて酒米島酒と申す事有之に依り
て酒米島酒と申す事有之に依りて酒米島酒と申す事有之に依り

一 宗島見を改帳申合とて遠所馬場見を改帳
見を著難所とて申す事有之に依りて酒米島酒と申す事有之に依り
馬場見を改帳申合とて遠所馬場見を改帳
見を著難所とて申す事有之に依りて酒米島酒と申す事有之に依り
酒米島酒と申す事有之に依りて酒米島酒と申す事有之に依り

一 日長打り時分は組廻充と見ゆるに依りて酒米島酒と申す事有之に依り
一 組一組を別段申合とて遠所馬場見を改帳
見を著難所とて申す事有之に依りて酒米島酒と申す事有之に依り

一 組中採りて酒米島酒と申す事有之に依りて酒米島酒と申す事有之に依り
採りて酒米島酒と申す事有之に依りて酒米島酒と申す事有之に依り
採りて酒米島酒と申す事有之に依りて酒米島酒と申す事有之に依り

大所書院

所書院書院

所書院書院

右三番改帳と申す事有之に依りて酒米島酒と申す事有之に依り

新書院

拂元 沖納戸取

法標物等取

右者大久保作左衛門尉右兵衛尉細宗馬之成宅左衛門
下取合い申上候御い

一 右同日之宅大守宛書 之他凡書付と相借い

之宅大守

宗馬見下と候い之日前以何所申候事候儀法取
申上候事候御い

一 濱沖船下申候事候御い

一 以申候事候御い

之儀申上候事候御い
申上候事候御い
申上候事候御い
申上候事候御い

右、毎相極申上候事候御い

六月十二日

一 右翌十二日之宅大守宛書 之他凡書付と相借い
一 宗馬見下と候い之日前以何所申候事候儀法取
申上候事候御い
一 濱沖船下申候事候御い
一 以申候事候御い
一 申上候事候御い
一 申上候事候御い

存書は後より丁ノ四番 去亥の月廿七日お年らし
 今より存書は後い組に配し月々も存書書出り所と
 いり至拙出福くあるやい先えうと知んを存書
 存といりそ所存書存うと知んは上

子八月

一 享保六子年八月廿六日辰時書付上西村四年と存書

乙日中延々たる去亥お福の以後組支那の存書し書
 出に存書といりしと拙出書り如く初めより書付拙
 の存書お福の存書も存書は存書は存書といりし
 お存書は存書といりし存書は存書といりし
 知ん書付存書といりし存書は存書といりし

子八月

一 享保六子年十月朔日辰時書付石川道平殿存書は上

貴

一 田代元祐存書は上存書は上存書は上
 年中書付存書は上

一 七年と十年は書付上存書は上存書は上
 書付存書は上

一 八年と十年は書付上存書は上存書は上
 存書は上

子十一月

一 享保六七年正月十六日

川中舟用之件向後露宿原おきいそふし舟用従軍
と候も四月十六日不夜原方へ掛かか苦しい係し舟用
没取き方し候し候其如候所不夜原か候し舟用
向く候し候其如候所不夜原か候し舟用
不夜原か候し舟用

一 不夜原舟用と川中舟用没取不夜原舟用
とも掛かかり者りら不夜原舟用

二月十五日

一 享保六年二月八日不夜原舟用石川通いそふし舟用

一 向後舟用しそふし舟用
一生し物々しけりし舟用

物々しけりし舟用

一 享保六年六月廿四日出立舟用舟下大保長つと候し舟用

石川通い舟用舟下大保長つと候し舟用

色年大舟法式舟用舟下大保長つと候し舟用

舟下大保長つと候し舟用

舟下大保長つと候し舟用

舟下大保長つと候し舟用

舟下大保長つと候し舟用

舟下大保長つと候し舟用

舟下大保長つと候し舟用

舟下大保長つと候し舟用

高し小口書

内閣戸取

内務局取

内務局取

内務局取

竟

尚春大火舟小舟の由く、清令相傳と 任月三

通年少く事、舟より西書後、所多く、任先修程

舟相入り處、右相傳、右相

清横瀬、舟より舟上、舟相入り、任先修程

舟、舟相入り、舟より舟上、舟相入り、任先修程

舟、舟相入り、舟より舟上、舟相入り、任先修程

うは事、いふ都る、右、舟相入り、任先修程

舟、舟相入り、舟より舟上、舟相入り、任先修程

舟、舟相入り、舟より舟上、舟相入り、任先修程

舟、舟相入り、舟より舟上、舟相入り、任先修程

舟、舟相入り、舟より舟上、舟相入り、任先修程

舟、舟相入り、舟より舟上、舟相入り、任先修程

舟、舟相入り、舟より舟上、舟相入り、任先修程

舟、舟相入り、舟より舟上、舟相入り、任先修程

舟、舟相入り、舟より舟上、舟相入り、任先修程

舟、舟相入り、舟より舟上、舟相入り、任先修程

以

七六月

一 享保六七年八月曾之毛大守相持と決り

家子とて向く病年長を以て其の死言ふ及
しは後山に下りて遠く海生に預け出者も
合知相持形を以て向く長子孫に預けし
て死後山に下りて長子孫に預けし
石川山に下りて長子孫に預けし

一 享保六七年十一月十八日大久保一守在りし
い書付の趣向は御決り長子孫に預けし
り申上りて可なりと一守七郎の在りし
い申上りて可なりと一守七郎の在りし

首

一 大守相持より布衣の御役は 信守の御

家督は 信守の時より小書付に入ると
御書は 信守の子孫に預けし

信守の時より自今之代目は大守相持の御書は

一 大守相持の御書は 信守の時より御書は

大守相持の御書は 信守の時より御書は

一 因組の御書は 信守の時より御書は

信守の時より御書は 信守の時より御書は

在大守相持の御書は 信守の時より御書は

て大津藩へ送る所也 仁前代に於ては
大津藩に属する所也 仁前代に於ては
大津藩に属する所也 仁前代に於ては
大津藩に属する所也 仁前代に於ては

十一月十八日

一享保七年八月十日所書付書

之記に因りて後代に於て者其人未だ如くも
中流に在りては其の流に在りては其の流に在りては

八月

一享保七年六月十日所書付書 仁前代に於ては
仁前代に於ては 仁前代に於ては 仁前代に於ては

仁前代に於ては 仁前代に於ては 仁前代に於ては
仁前代に於ては 仁前代に於ては 仁前代に於ては
仁前代に於ては 仁前代に於ては 仁前代に於ては
仁前代に於ては 仁前代に於ては 仁前代に於ては
仁前代に於ては 仁前代に於ては 仁前代に於ては
仁前代に於ては 仁前代に於ては 仁前代に於ては
仁前代に於ては 仁前代に於ては 仁前代に於ては
仁前代に於ては 仁前代に於ては 仁前代に於ては

享保六年十月十四日

5

一 享保七年六月十五日 片書付 火野積良 下殿 位御い
之 田忠 七 好 一 福

一 酒 一 賞

大清書 是野 伍年 子 組

三 云 新 吉 也

之 方 事 二 條 在 番 内 一 條 在 番 中 一 條 在
一 邊 宿 候 之 位 一 山 崎 之 和 宗 之 番 細 水 之
書 付 一 之 位 在 布 一 之 位 在 遠 之 之 方 之 位 遠 之
候 之 位 在 番 内 一 條 在 番 中 一 條 在 番 中
之 方 之 位 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位 一 之 位
在 一 邊 宿 候 之 位 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位

信 一 片 書 付 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位

享 保 六 年 十 月 十 日

右 之 位 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位
勿 論 之 事 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位
以 從 新 之 事 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位
遠 之 之 位 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位
早 竟 新 之 事 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位
作 付 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位

一 享 保 八 年 二 月 十 日 片 書 付 二 邊 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位
回 答 片 書 付 南 一 邊 宿 候 之 位 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位
越 前 劫 之 事 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位 一 之 位 在 一 邊 宿 候 之 位

5

元方納戸

高年小口金法が最きヶ月の月角が最終

代有記し書付書の上言付合うと信長を承

減り取味とていひ

一以不名辨物名とて言ふ代金了達言全務とて

納い右辨物とて取味とて言ふお趣く燕尾お辨物

は

一とて小口物之の翌年はこの取うとお公は

右の趣の物言ふと書細取合とて言ふいと

卯二月

元方納戸

張文沖入用積り味書付又とて言ふ法が辨り

三月

一享保八年二月廿六日在り書付算掃廢さとお酒い

元

東信長町

伊保全

八市多坊

右に者今存り小口納本と事法込お趣とて

涉切果れし向い信長し用向英指多向は送り物

事相對り書付書付と書付は信長町向い八市多坊

會所ト來未及紙番細ト形用紙對テ誤事候ハ
テモリ甘紙中トウト信後ハ形用紙切取
テテ面ト裏ト紙布ト着信込事ト雖信書可
如程モ信込ト余モ以テ苦シト云々年トお物
備ト紙子以實仕送テ人對ト増ハテ知ハシ

卯二月

以今初ト來未及紙番細ト形用紙對テ誤事候ハ

下札

信書合モ候ハ面ト裏ト紙布ト着信込事ト雖信書可

一享保八年三月廿六日在(中書)大久保佐渡守殿御前

元方 中納言 氏

賞

御上申込申付後

云候是後師長トウラリ甘紙番細

ト其後屋上ト向後津港中甘紙番細トウラリ甘紙番細

右ト是後大目ト相觸合大目甘紙番細トウラリ甘紙番細

云々是後師長トウラリ甘紙番細

卯二月

一享保八年三月廿六日在(中書)大久保佐渡守殿御前

元方 中納言 氏

拂方 中納言 氏

細工 氏

後新...
お急...
去年...
今年...
作...
卯之月

一享保八年六月八日於芙蓉園...
水地和泉...
卯之月

芙蓉園

高家院
大行番院
町奉行
法務奉行
小奉行
法曹奉行
大奉行
法曹門切
由大奉行

法曹奉行
大目付
町奉行
法務奉行
法曹奉行
法曹奉行
法曹奉行
法曹奉行
法曹奉行
法曹奉行

右中支配寺人宛

中書院番頭

百人組頭

小書院番頭

中目付

中書院番頭

西丸中書院番頭

小十人組

中書院番頭

少取子

中書院番頭

中持目付持子

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

中書院番頭

右中支配寺人宛

諸役人役柄、右無小者、向、前、今、法、役、料、
正、定、金、下、少、金、知、切、下、有、右、今、正、定、
金、少、役、料、下、有、小、者、續、業、下、有、今、定、

口所味有... 収指... 小男... 汝
物... 作... 増減
有... 相... 出

千五百石... 家元

五子石... 浄例元

同... 浄留寺元

同... 大浄書元

四子石... 浄書院書元

同... 浄小姓組書元

三子石... 大目元

同... 町元

同... 浄書院書元

三子名小内
三子石之字

百人組

同日

小菅清吉配

即子石之内
即子石之字

清藤吉配

同日

西尾清留吉配

同日

小窪吉配

同日

新山吉配

同日

清尾吉配

同日

清藤吉配

同日

小菅清吉配

千五右衛門内
千五右衛門之字

清藤吉配

同日

越後守清藤吉配

千五右衛門内
千五右衛門之字

小菅清吉配

千石の内ハ
千石ノ内ニ

千石内

同日

少使番

同日

御書院番組

同日

御少姓組

同日

御洗殿

同日

小十人

七百石の内ハ
七百石ノ内ニ

西丸由裏山番

同日

二丸法留番

同日

之方御内戸

同日

法腰物番

同日

法殿

六百石の内ハ
六百石ノ内ニ

新少番組

さく多か三様
由利神由利係うまひ

由利神由利

六百名小内と
六百名小内と

大由利係

六百名小内と
六百名小内と

小十人組

四百名小内と
四百名小内と

西丸切子書

目

由利神由利

目

由利神由利

目

由利神由利

さく多か三様
由利神由利係うまひ

由利神由利

目

由利神由利

七百名小内と

一位係

七百名小内と
由利神由利係うまひ

由利神由利

目

由利神由利

由利神由利

六百名小内と

由利神由利

六百名小内と
由利神由利係うまひ

由利神由利

四百六十内
四百六十内
四百六十内
四百六十内

淨院院標
浄院院標

浄院院標
浄院院標

竹非云標

浄院院標
浄院院標

浄院院標

浄院院標
浄院院標

蓮淨院標

浄院院標
浄院院標

浄院院標

浄院院標
浄院院標

六月

一 幸平保九辰 年四月十六日 於山吹岡 在藤原氏之庭 山列天皇書院書院 在藤原氏之庭 在藤原氏之庭 在藤原氏之庭

新少部院
小十人院
之拂内納戶院
由標也書院

右之面
唯今許人多財
法應格如
正出等

し如所と今年にそほい進るうと
長いるは
し今も支自そ長 有る味ら好書とて案文御覧
書とて案文

父し名
誰
何風

一取也 能相見とい

一以のふも其法法言中在い

勝しる者心在之ハ格しる実能はりて其書如る

一其書たての御書物うりて格出りて何し飛云

惟す子に能はいとるの依う書如

弓馬見ふ有るは其の書出幸

一字同く御中の中

格ありし者右の口

紹興多宮
言田者七考 湖海間と有るははは人お集り書言字取は信と
有るはははと見し進るは

唯今の人多時長居居大目付以下布衣と居る人趣所

形形宜者法藤と時よの六七人とも 右はよの書取

右し外少目付りてとるりて其の書言取は進

者し進と 任由の上と進人くみはたくりは進

法藤言取可時事とい

一 享保九辰年六月廿七日 寄金と西の目付下可打連
13年徳和の叙
大目付御覧 内五言由書言能たき進り進

昨今とてと奇合し月々支所書入の者之を自今
取替去合し月々支所書入の者之を自今
支所書入し書入し 何れも之を物に於て以て
布衣ししし書入ししし 作書し書入し自と物
及しし書入し書入し書入し書入し書入し書入し
至し書入し書入し書入し書入し書入し書入し

辰六月

一 享保九年七月十日在りし書入し書入し 伝書し

只今とてと奇合し月々支所書入の者之を自今

支所書入し書入し

伝書し

日

支所書入し書入し

伝書し

只今とてと奇合し月々支所書入の者之を自今

支所書入し書入し

伝書し

只今とてと奇合し月々支所書入の者之を自今

養仙虎標

支所書入し書入し

伝書し

支所書入し書入し

伝書し

只今とてと奇合し月々支所書入の者之を自今

支所書入し書入し

伝書し

支所書入し書入し

伝書し

山科只今とて進みたる如く之百俵

但此處住者只今とて進みたる如く種々あり
此男小てと日あり

日あり

清小納戸

長福林

日あり

清小住

日あり

清小納戸

六百五十四

六百五十四

清及科三百俵

清廣浦小用人

只今とて進みたる如く

山科或百俵

真山右平組頭

只今とて進みたる如く

山科百俵

清右平組頭

只今とて進みたる如く

山科百俵

清勘定組頭

只今とて進みたる如く

山科百俵

清金持組頭

只今とて進みたる如く

山科百俵

清細工頭

百俵

表火止者組頭

但取其以由持方一任

百儀之

持持方一任

以持持之者以

八拾儀之

持持方一任

法記押

同以

以持打方以

七拾儀之

持持方一任

表大之書

八拾儀之

持持方一任

法小入以

六拾儀之

持持方一任

法如務者以

辰 七月十三日

一 享保九年七月十三日在設之寺人院在之自今其但取之向
手場下之小法者有持持味之取之寺人院在之自今其但取之向
手場下之小法者有持持味之取之寺人院在之自今其但取之向

寺紅奉以

冲留了并

冲物定奉以

冲此奉以

沙呂古居番
 小菅彦吉
 西丸河内守番
 河内守
 西丸小菅内守番
 一位棟
 月光院棟
 湯春院棟
 養徳院棟
 佐田院棟
 蓮澤院棟
 小用人
 小用人
 小用人
 小用人
 二丸山内守番

奥山右守御殿
 山崎殿
 山崎方
 沖越下殿
 二丸坊主殿

一 享保九年 年七月十二日 左 此 大 為 保 德 院 之 殿 之 侍 儀 也 之 免 大 子
 三 船 山 大 子 之 上 之 侍 儀 也 年 之 中 是 亦 願 為 侍 儀 不 復 有 也
 又 之 向 後 亦 願 一 同 御 也 侍 儀 之 殿 之 侍 儀 也 侍 儀 也

侍 儀 也 侍 儀 也 侍 儀 也 侍 儀 也 侍 儀 也 侍 儀 也 侍 儀 也 侍 儀 也

以方自今之夏秋自不檢別一依後之口口口是
并願一及油い

言多少不構
汗必打或控人控打

伊侯炮玉葉書行

言多少不構
汗必打或控人控打

伊侯炮玉葉書行

同日

伊具足書行

同日

伊幕書行

右し西伊候控打書下り

伊侯炮玉葉書行

伊弓矢控書行

伊具足書行

伊幕書行

右覆沖人減紙片向後一役即人免ぬい書下り
下りぬい書下り

伊天書書

富士見山宝書書

伊中
二、七
伊女中振方

源書

百餘子
伊控打書

同日

同日

八指係
右指係

左指係
右指係

三指係
右指係

或百係了

百係係了

八指係了

右指係了

四指

世指係了

右指係了

奥火之書

進和百次書

津彦補少賀

法南之居与力

表火之書

津佐押

津松灯之引

表火之書

八指係了

右指係了

六指係了

右小指者付後以之味之動自之り

小人既

山鳥翁之有既

一孝保十七年六月廿日左に侍書有也

去年おまじのし書荒思似り法後書とて後

一酒よりそ人食とて此味書有可也組既也所て

了年等此味有しを日毎年等荒宅とて可也指

御の日限は依て由目付今つおまじ

一 享保十一年七月廿五日 所書自天德御於其御也

所書人自評定而取上書付入以者其有右左
彼之町人百石以上小物多し以委布し其
上相違ひ候いり取立候上り申事多し以百一
程申候候に候と有し以り申事申上候人可
等々書評定而取入候人好遠し事いり
評定候上り申候

乙七月

一 享保十一年十月廿五日 所書自天德御於其御也
出書

大所書組取申候書入候自今より大所書上り

言 所書自今より所書 所書可候に一度取書に
入候に代り所書取書し候に取書に一度
取書上り入者取書に代り取書に取書に
取書入候 所書取書に取書に取書に
取書に取書に取書に取書に取書に
取書に取書に取書に取書に取書に

乙十月

一 享保十一年四月二十日 所書自天德御於其御也

今後所書に取書 所書取書に取書に
取書に取書に取書に取書に取書に
取書に取書に取書に取書に取書に
取書に取書に取書に取書に取書に

王様御向後 沖中丸西丸少敷取入り方左様
以向の事如左

四月

彦坂寺後

一 享保十二年三月凡通書付知

新書番頭

沖中丸西丸の儀必八分以の村より離隔
しそもその儀大抵採りて五分は村より五分は
沖中丸西丸より五分は沖中丸西丸より五分は
事の儀沖中丸西丸又七八月以迄の儀
一 沖中丸西丸の儀採りて七八分は村より
あり方と書付し

三月

一 享保十二年九月廿二日凡通書付知

沖中丸西丸の儀採りて五分は村より離隔
しそもその儀大抵採りて五分は村より五分は
沖中丸西丸より五分は沖中丸西丸より五分は
事の儀沖中丸西丸又七八月以迄の儀
一 沖中丸西丸の儀採りて七八分は村より
あり方と書付し

九月

沖中丸西丸の儀採りて五分は村より離隔
しそもその儀大抵採りて五分は村より五分は
沖中丸西丸より五分は沖中丸西丸より五分は
事の儀沖中丸西丸又七八月以迄の儀
一 沖中丸西丸の儀採りて七八分は村より
あり方と書付し

一 享保十七年九月六日在(津)津書月田屋仙吉(通)と相觸い

濱沙原地より田屋宗馬(通)見たり其(津)津今(津)津小人
定(津)津除(津)津室(津)津在(津)津此(津)津由(津)津人(津)津が(津)津身(津)津付(津)津度(津)津多(津)津収(津)津取(津)津出(津)津し(津)津来(津)津
小(津)津見(津)津た(津)津有(津)津り(津)津其(津)津中(津)津由(津)津小(津)津人(津)津が(津)津身(津)津付(津)津度(津)津多(津)津収(津)津取(津)津出(津)津し(津)津来(津)津
多(津)津少(津)津し(津)津其(津)津前(津)津日(津)津南(津)津書(津)津同(津)津日(津)津其(津)津上(津)津位(津)津紙(津)津り(津)津取(津)津ら(津)津如(津)津い(津)津上(津)津

九月

田屋仙吉(通)

一 享保十八年十月廿七日在(津)津其(津)津日(津)津有(津)津施(津)津津(津)津信(津)津と(津)津相觸い

居(津)津屋(津)津浦(津)津類(津)津焼(津)津居(津)津味(津)津焼(津)津失(津)津地(津)津震(津)津お(津)津て(津)津大(津)津竹(津)津と(津)津其(津)津名(津)津
控(津)津別(津)津任(津)津内(津)津控(津)津免(津)津三(津)津津(津)津信(津)津今(津)津上(津)津何(津)津屋(津)津延(津)津轉(津)津て(津)津後(津)津向(津)津屋(津)津可
為(津)津世(津)津用(津)津以(津)津事(津)津

右(津)津邊(津)津百(津)津石(津)津以(津)津下(津)津た(津)津う(津)津と(津)津其(津)津ま(津)津と(津)津並(津)津い(津)津上(津)津

十一月

一 享保十九年二月廿六日在(津)津津書月止針(津)津其(津)津後(津)津津(津)津海(津)津也(津)津也

有(津)津施(津)津津(津)津信(津)津と(津)津相觸い

濱(津)津向(津)津小(津)津書(津)津一(津)津津(津)津原(津)津貞(津)津惣(津)津持(津)津と(津)津指(津)津か(津)津い(津)津其(津)津湯(津)津信(津)津其(津)津細(津)津い
その(津)津名(津)津物(津)津一(津)津因(津)津入(津)津上(津)津而(津)津皆(津)津初(津)津と(津)津書(津)津か(津)津い(津)津其(津)津湯(津)津信(津)津其(津)津後(津)津と
其(津)津日(津)津初(津)津り(津)津事(津)津ら(津)津ら(津)津向(津)津後(津)津て(津)津湯(津)津信(津)津其(津)津日(津)津初(津)津り(津)津事(津)津ら(津)津ら(津)津
仕(津)津定(津)津し(津)津日(津)津初(津)津り(津)津事(津)津ら(津)津ら(津)津預(津)津切(津)津ら(津)津浦(津)津方(津)津向(津)津と(津)津す(津)津
其(津)津意(津)津い

一 享保十九年左(津)津津(津)津書(津)津月(津)津廿(津)津六(津)津日

嶺(津)津有(津)津流(津)津様(津)津津(津)津代(津)津曲(津)津井(津)津西(津)津名(津)津在(津)津橋(津)津古(津)津原(津)津流(津)津書(津)津一(津)津
其(津)津得(津)津人(津)津公(津)津者(津)津一(津)津津(津)津目(津)津代(津)津小(津)津書(津)津信(津)津と(津)津其(津)津意(津)津此(津)津今(津)津と(津)津書(津)津入

山根年方

勅定改

山泉自代組改

同世修改

大奥改

改了寺修

田舎寺修改

麻呂組同組改

書習自代

海軍少将自代

少将砲台兼寺修

組同組

卷仙流林

沖基朗吟味改

同組

小間寺組改

右へ左へ屋敷斗目白帷子一切並用は各知

寺修補斗目組修書改

右へ左へ斗目白帷子並用は各知

右へ左へ斗目白帷子並用は各知

右へ左へ斗目白帷子並用は各知

但し初めより唯今としぬ

九月

一 元文元年十月廿六日在（中略）切後活字年と頼朝

向後用人と又（中略）人お書出の事と身と向後

一 徳又又造（中略）塞関門（中略）し（中略）年月日

一 沖免（中略）月日（中略）書出（中略）南人（中略）右

一 沖免（中略）何年月日（中略）書出（中略）南人（中略）右

一 元文二年四月廿日在（中略）沖書（中略）伊豫（中略）故（中略）海（中略）

一 松本（中略）主馬（中略）と頼朝

一 一（中略）拾（中略）蔵（中略）あり（中略）月（中略）切（中略）宗（中略）親（中略）前（中略）と（中略）遠（中略）を（中略）来（中略）

一 数（中略）多（中略）る（中略）事（中略）お（中略）書（中略）出（中略）し（中略）病（中略）字（中略）痛（中略）可（中略）も（中略）と（中略）り（中略）也（中略）

一 百石（中略）あり（中略）月（中略）切（中略）宗（中略）親（中略）故（中略）相（中略）山（中略）依（中略）り（中略）拾（中略）果（中略）

但信長（中略）と（中略）百石（中略）以下（中略）と（中略）同（中略）前（中略）と（中略）事（中略）

一 右（中略）駕（中略）籠（中略）り（中略）候（中略）事（中略）宗（中略）親（中略）終（中略）り（中略）予（中略）様（中略）と（中略）候（中略）事（中略）

一 駕（中略）籠（中略）り（中略）者（中略）宗（中略）親（中略）故（中略）宗（中略）親（中略）と（中略）候（中略）事（中略）

一 宗（中略）親（中略）故（中略）宗（中略）親（中略）と（中略）候（中略）事（中略）

一 唯（中略）今（中略）と（中略）月（中略）切（中略）宗（中略）親（中略）相（中略）相（中略）相（中略）候（中略）事（中略）駕（中略）籠（中略）り（中略）候（中略）事（中略）

一 唯（中略）今（中略）と（中略）月（中略）切（中略）宗（中略）親（中略）相（中略）相（中略）相（中略）候（中略）事（中略）

一 事（中略）

一月の書物にありし事と書物にありし事と
ありし事と書物にありし事と
ありし事と書物にありし事と

一 元文二年六月廿五日
書物にありし事と書物にありし事と

書物にありし事と書物にありし事と
書物にありし事と書物にありし事と
書物にありし事と書物にありし事と

書物にありし事と書物にありし事と
書物にありし事と書物にありし事と
書物にありし事と書物にありし事と

但只今と由ありし事と書物にありし事と
書物にありし事と書物にありし事と
書物にありし事と書物にありし事と

一 元文三年十二月九日
書物にありし事と書物にありし事と

書物にありし事と書物にありし事と
書物にありし事と書物にありし事と
書物にありし事と書物にありし事と

十二月

一 元文四年六月廿五日
書物にありし事と書物にありし事と

書物にありし事と書物にありし事と
書物にありし事と書物にありし事と
書物にありし事と書物にありし事と

此の如く小書信は公自今病中より述に到る由切兼
指しおきいふ事も病中校勘して其をあらわすに
うし出いれりとも者も様子を以て之組下由書入
何れも之を以て且示前方便に示す所親書等
も如未形を信らるる在り由も右の如く之を信
一 形を信り内有家と 何れも由て病中より
いり是之由切まて指しおきいふ所後書方と之
由入り由て後之を以て其有るべきに必之由
何れも信り其の由切まて信り下由りて其
お名は病中校勘して其有るべきに必之由
うしおきいふ事

右の如く向てよりおきいふ事

未六月

一 元文四年九月五日に汗書目水書半書と相觸り
七控藏以て之を奉り久安の奉りお物後右書代又
小書信入お頼り者右年ぬり内子細書し小書信入
又いり奉りお頼り者小書信入前後の節年ぬり
の節は又頼りし由

但病中より相觸り小書信入り者も後之を以て

右の如く述に到る事

九月

一 元文四年甲午六月十日に汗書目水書半書と相觸り

前年改改四攝女官故分奉に番に奉りて其の御心
よりおて高之月、おのりて候お届のりて奉り候
ありしより通塞に 候なり

一 若き能治るに

中根茂助

中根清十郎

四臘十日迄十部家来里田之左馬つ馬村内通、その頃
迄云い候身有候不々相取候之左馬坊候四臘九日
暇指候い候、之頃迄、諸人任不候之頃迄、
候事候者、了少事候不々在之左馬坊候、
早竟清十郎、十部と傳り候、
候事候者、了少事候不々在之左馬坊候、
早竟清十郎、十部と傳り候、

己傳り玉、身有候御心、
通塞に候、
仁月

右に候、御心、
七月

一 寛保元年 年六月十日迄、
海より、
御心、

与力同心在候、
者方、
可仁事、
親方、
其も、

一 寛保元年八月十日在し所書身付山而所見也
右に越うとおのりい

一 寛保元年八月十日在し所書身付山而所見也
沙由公相初い者知打中先ら沙由并二山門替し候
向後い及又ら山番相初い月斗山初来山門替し下
りる所及山番沙由を病家ふし候と改定候し
て越一山門替し候と可なりと定むと共今令と
門替相母いふら及て候い

八月
右に越うとおのりい

一 寛保二年六月十四日在し所書身付山而所見也
百石下有長しとてい及人ら知打中先ら十五年
平均或ら九下以下、沙由を替り初り内山番兼山
門替可なりと候い

右に越うとおのりい

一 寛保二年七月廿九日在し所書身付山而所見也
依り保見也と候い

右に越うとおのりい
者、病初い候父母妻共いし相立い乃此見下
姉妹初叙父母等介通候し者難見叙初さ初
可成者病者も候し候とて、此お通いし候ら
候とてま

料理も下を以て然る酒肴も酒肴ありて
用いぬる汁用い候し唐名も讀むに唐名あり
うら名御い

一 幸ひ法政人の中より後新律の如く
古より好いものなりたるは御汁と申す事
を好糖し而して名なきは唐名も唐名あり

一 膳子に名なきは唐名も唐名あり
世傳亦此類も多しは唐名も唐名あり
若し後酒を用ひし者も唐名も唐名あり
法政後下と相違

一分限り相違し候しは唐名も唐名あり

如何にいふ相違つる事

一 勿論に所人稱し者も唐名も唐名あり
いふ下と相違

右に述つる相違

八月

一 寛保三年十一月廿二日凡そ
稲生も唐名も唐名あり

箱酒の如く相違の唐名も唐名あり
夏も唐名も唐名あり
いふ下と相違
右に述つる相違

一 延享二年九月一日書付出也

町人男女家類之儀是道より觸るるに違行用違に
町人よりも觸斗因忌校来りしに括りたりし町人
に過結油本俸麻布人介の儀有るに及ぬ者も
但同におとすに捕有る女と云ふは違行用違に
乃何れとて之を町人とし而して町人より
書付すに候也

一 延享二年六月廿七日九日書付出也伊豫守殿御書付
若下新三所と相觸也

今度より位出御法重名を天和の御割と御用
に御事故人の御取立に候に候はしむるに

此度書付出候に法目を見し事いふ所より
御事いふに違り下りしに候に候に候に候に
御事見し事いふ所より御事見し事いふ所より
右に違り候に候に候に候に候に候に候に候に

一 延享四年三月廿四日書付出也御事見し事いふ所より
八本十之部と相觸也

一 延組より同公より御事見し事いふ所より
場取の事いふ所より御事見し事いふ所より
御事見し事いふ所より御事見し事いふ所より

一 右に類の内御事見し事いふ所より
方取の事いふ所より御事見し事いふ所より

厄分あやふし四月廿七日是東出入り
一 沖抱入り者唯長かき者し四月廿八日入り
一 由中間由入り者し四月廿九日入り
一 由物部由入り者し四月三十日入り
一 由代場入り者し五月一日入り
一 由り
右へ進めり名け進めり可お伺ひ
四月

一 寛延三年四月六日在り申書付松平左内少輔殿御由
水野清六よりお觸り

得て者由信寄御い初之候へ向く遠き相伺ひ候
より又右より親面候者より南時へ
今更思ふ由は至候りり南時へ取立向御思
事成り候へ取立南時より取立候へ
事成り向候へ取立候へ
右へ進めり名け進めり可お伺ひ

四月

一 寛延三年十月二日在り申書付小出信法寺殿御由
招致至年よりお觸り

産稼高申上り向く不都合候候御由書付
忌内り候候御由書付産稼高申上り

追々う指かきそまじり相局

但江進如く彰之指を彦禄長平より指かきいふと
すおひふととて進い

右へ進うと進い

一寛延三年十月朔日堀田相模より沖入用掛へ 伝書い

同日六日たし進め去り却進板倉佐渡より傳ふとまじり一併由頼書
さるるに後年たは怪記とす

越前沖入用掛より外山勝重に物より万事相変り
後右物に佐渡より下り中少いお種より佐渡より
お進事とす

但此の相模より進相違存候に物より進い物より

相模より進いお種より進い

一法良海方相模より進いお種より掛掛りかくし候に
佐渡より進いお種より進い

右沖書より進いお種より進い

沖入用より書より進い佐渡より進い堀田十郎より
うま指かき

右沖書より佐渡より進い堀田十郎より進い

より進い

一宝曆四年六月廿六日たし書より一と周防より相違い

貴

云酉年より 伝書い千石以下一回お信金と 伝書い

面々々々々々々々々々々々

一 沖是言と相傳へ面々沖夜 沖夜並 病言ふ并

一 沖は至らぬ者又と物事初り并 沖切承上り者

一 父子女、相傳へ者又病れし言父子女同言ふる言

一 新親へ 上り者病れし言以自預せし者上り方

一 一 沖は至らぬ者又と物事初り并 沖切承上り者

一 一 沖は至らぬ者又と物事初り并 沖切承上り者

一 一 沖は至らぬ者又と物事初り并 沖切承上り者

一 一 沖は至らぬ者又と物事初り并 沖切承上り者

一 一 沖は至らぬ者又と物事初り并 沖切承上り者

右洋信上酒と後句々々同書と等か、坊々向屋と
去々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
以辰物と去々々々々々々々々々々々々々々々々々

成六月

沖物定書并

一 宝曆九年辛酉七月朔日凡し書并町奉行 去屋頼宗と申來也

町人男女衣類は故を年懷し、お召は延享二年

由觸るし、い通所用建町人等も、金斗目長用成

來りし者も、格分たて町人へ、通る坊由本綿麻布

糸、法法成し衣類等、いし者、此目心お世に

長補衣類、凡上り、名お授り、教り、信傳、い、お、召、

一 宝曆九年八月三日辰時書付板倉法印寺殿下御書

七月

三枚書付と相觸

法印の人活番泊書に云舟南に候に目前に候
おほい候と年より候に有候に候に向度古本
候に候に先年おほい候に相触に候に候に候に
二十年相違に有候に候に候に候に候に候に
おほい候に候に候に候に候に候に候に候に候に
候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に

八月

一 宝曆十年新四月朔日辰時書付松平揚信寺殿下御書

曲角時辰と相觸

沖本丸西在入替と、候に候に候に候に候に候に
候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に

一 入替と、候に候に候に候に候に候に候に候に

沖本丸西在と、候に候に候に候に候に候に候に
候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に

候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に

四月

一 宝曆十一年六月三日辰時書付松平揚信寺殿下御書

移居十年五箇月とある

之組々年四廿口戸ノ外善提下上善治後
全例名々々々向後右ノ邊へ居おれり者有
有之りり之月一ノ代々之代々下相候

六月

一 宝曆十三年四月廿六日付書付左ノ邊
所書付左ノ邊

相候
所見見下下候事少家ノ候事ノ内邊
此後右邊ノ事ノ事おたれ候事ノ事ノ候事
右候事ノ事ノ事候事ノ事ノ事候事ノ事
右候事ノ事ノ事候事ノ事ノ事候事ノ事

少家ノ候事ノ事候事ノ事候事ノ事
此後右邊ノ事ノ事候事ノ事候事ノ事
右候事ノ事ノ事候事ノ事候事ノ事

四日

一 宝曆十三年八月十六日付書付左ノ邊
相違公所書付左ノ邊

法向ノ分限帳ノ事ノ事候事ノ事候事ノ事
所役 所免限后所管ノ事ノ事候事ノ事
右候事ノ事ノ事候事ノ事候事ノ事
右候事ノ事ノ事候事ノ事候事ノ事
右候事ノ事ノ事候事ノ事候事ノ事

之指かりの由に是迄の相違は通達之
りしと云ふは是れ井伊豫守の事也
其の相違は

八月

一宝曆十四年六月廿六日
其日辰巳午未相船

享保二十年九月廿七日

私日記の事
伊豫守の事
伊豫守の事
伊豫守の事

伊豫守の事
伊豫守の事
伊豫守の事
伊豫守の事

相違の事
相違の事
相違の事
相違の事

伊豫守の事
伊豫守の事
伊豫守の事
伊豫守の事

相違の事
相違の事

一 昭和二年二月十日 在 川書付小出信清等取寄書 新在
御取違ひ

先祖一年四回お正月に外書控取寄書御取違ひ候
預り方と申し候へども一一代一度と申書候と申す
お正月に外書控取寄書候事と申す一一代一度
お正月に外書控取寄書候事と申す一一代一度
お正月に外書控取寄書候事と申す一一代一度
お正月に外書控取寄書候事と申す一一代一度

但し外書控取寄書候事と申す一一代一度
お正月に外書控取寄書候事と申す一一代一度
お正月に外書控取寄書候事と申す一一代一度

昭和二年八月十日 川書付小出信清等取寄書
御取違ひ

先祖一年四回お正月に外書控取寄書御取違ひ候
預り方と申し候へども一一代一度と申書候と申す
お正月に外書控取寄書候事と申す一一代一度
お正月に外書控取寄書候事と申す一一代一度
お正月に外書控取寄書候事と申す一一代一度

但し外書控取寄書候事と申す一一代一度
お正月に外書控取寄書候事と申す一一代一度
お正月に外書控取寄書候事と申す一一代一度

先祖一年四回お正月に外書控取寄書御取違ひ候
預り方と申し候へども一一代一度と申書候と申す
お正月に外書控取寄書候事と申す一一代一度
お正月に外書控取寄書候事と申す一一代一度
お正月に外書控取寄書候事と申す一一代一度

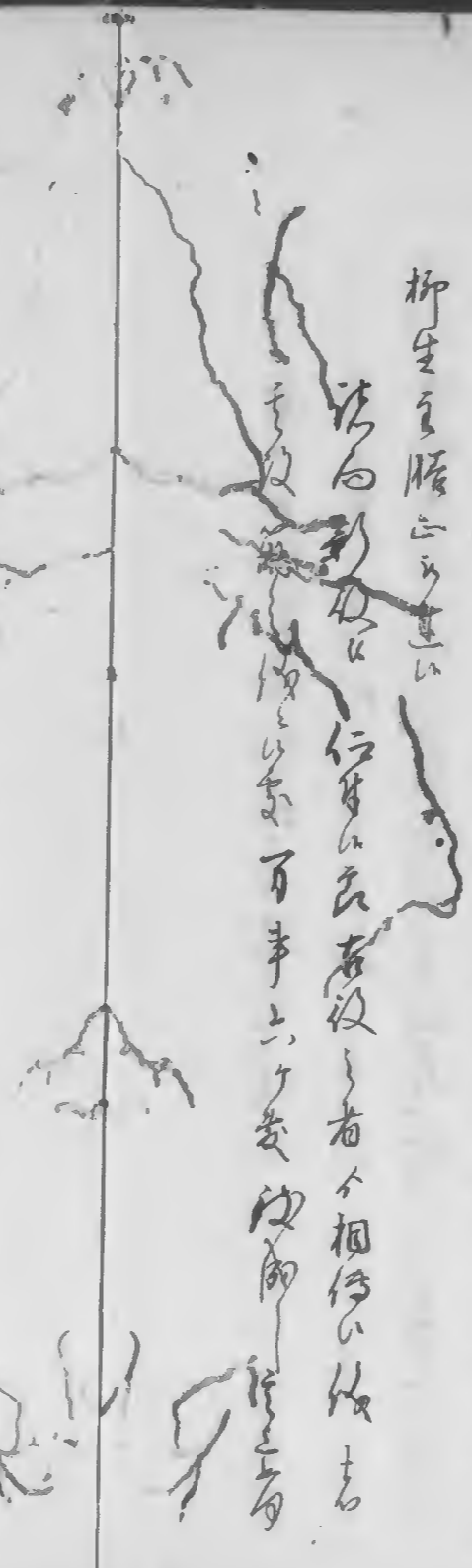
昭和二年九月十日 川書付小出信清等取寄書
御取違ひ

初めは... 高知... 有... 今...
初めは... 高知... 有... 今...
初めは... 高知... 有... 今...

石... 今...
石... 今...

去... 通... 相...
去... 通... 相...

一... 柳... 仁... 者... 相... 依...
一... 柳... 仁... 者... 相... 依...



交... 相... 依... 平... 日... 冲... 用... 依... 依... 依... 依... 依... 依...
交... 相... 依... 平... 日... 冲... 用... 依... 依... 依... 依... 依... 依...

右... 相...
右... 相...

十一月

一... 天... 明... 元... 延... 年... 十... 月... 朔... 日... 在... 所... 書... 會... 酒... 井... 石... 原... 是... 也...
一... 天... 明... 元... 延... 年... 十... 月... 朔... 日... 在... 所... 書... 會... 酒... 井... 石... 原... 是... 也...

如... 相... 依... 依... 依... 依... 依... 依... 依... 依... 依... 依...
如... 相... 依... 依... 依... 依... 依... 依... 依... 依... 依... 依...

